

〈修士論文要旨〉

モンゴルにおける文化遺産と地元住民

清水 奈都紀*

近年、世界遺産という言葉を目にする機会も増え、その保存や活用についても検討されるようになった。しかし世界遺産に関する研究といえば、ユネスコや国の政策などに着目したものが多くのように思われる。

筆者は2002年8月から1年間のモンゴル国留学期間中にいくつかの遺跡を見学する機会を得たが、保存措置を採られることなくゴミが散乱し、轍の走る遺跡も見られた。このような現状を地元住民はどのようにとらえているのだろうか。また、文化遺産というものを住民はどのように認識しているのか。住民の考えを理解することが、現在起こっている文化遺産の破壊を防ぐ一つの手掛りになるのではないかと考えた。そこで本論では文化遺産の保存活用を地元住民の立場からとらえ、今後の有効な保存活用方法についての考察を試みた。

本稿はモンゴル国の首都であるウランバートルと、ウブスハンガイ県ハラホリン郡でのフィールドワークにより得た資料に基づき構成されている。ハラホリン郡は2004年にモンゴル国で初めての世界文化遺産に登録された「オルホン渓谷の文化的景観」の登録範囲に含まれ、郡の中心にはモンゴル帝国時代の首都「カラコルム都市遺跡」と、それに隣接して16世紀に建てられた「エルダネ・ゾー寺院」がある。世界遺産登録に向けて、ユネスコ日本信託基金がこれらの遺跡の調査や整備を行った。また、「オルホン渓谷の文化的景観」は世界文化遺産の中の「文化的景観」というカテゴリーに分類され、登録に際しては考古遺跡だけでなく、その周辺の景観を維持してきた遊牧文化が高く評価されている。

本調査では、地元で文化遺産に関係する仕事に携わる人々を中心としたインタビューを行った。そして、インタビューにより得た資料をもとに、地元住民にとっての文化遺産とは何かを考察した。その結果、文化遺産と地元住民との関わりは薄く、住民参加の保存活用が行われておらず、また住民は文化遺産に対し観光による経済的還元を求めているが、現状では不十分であることが明らかとなった。さらに地元住民にとっての文化遺産とは、郡の中心にあるハラホリン都市遺跡であり、世界遺産登録の際に評価された遊牧文化が文化遺産である、ということに対する認識が非常に薄いことがわかった。

次に、モンゴル国の「文化遺産保護法」の規定に沿って、モンゴル国がどのような体制で文化遺産の保存活用を行っているかについて述べた。また、国が行っている活動や海外との合同調査についても紹介した。ここでは郡レベルの地方自治体では予算措置が採られていないことや、遺跡調査の際に保存活用計画が不十分であることを指摘した。

平成18年度 *文学研究科文化財史科学専攻

以上のように地元住民に着目して文化遺産の保存活用を考察したうえで、さらに今後について検討した。本調査では地元住民の意見を中心として考察を行ったが、文化遺産の保存活用とは国と住民とが協力しあって進める必要がある。特に長期的な保存活用計画を考えるうえでは地元住民の参加は欠かせない。そのためにも、国としては地元住民の啓発や育成など、文化遺産に対する意識を高めることを踏まえた保存活用計画を考える必要があるであろう。地元住民が文化遺産を正しく理解し、観光を含む保存活用へと参画することによって、住民の求める文化的還元と経済的還元が得られることになるのである。